

めざす児童生徒像

「自主・自律・活力ある丸中生徒」
・主体的に学習や活動に取り組む生徒 <自主>
・自らを律し、他と協調し、心を通わせることができる生徒 <自律>
・進取の気性に富み、たくましく生きる心身を持った生徒 <活力>

※児童生徒結果-教員結果-保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間				年度末				達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			※差	数値・アンケート結果 (%)			※差		
				教員	児童生徒	保護者		教員	児童生徒	保護者			
(学校重点項目)	授業改善	①、②の割合が100% ③の割合が90%	① 生徒が主体的に学びたいような授業改革に取り組んでいる。	100%		95%		100%		92%		<ul style="list-style-type: none"> 過去3年分の学校研究の取組をベースとして、授業改革に取り組んでいる。研究授業や校内研修などを通して、共通理解し、学校全体で推進が図られている。 顔を上げて聴く、聴き手に向けて話すことは少しずつ定着しており、話す・聴く等の場面のメリハリは全体で意識できている。 日々授業研究を行い、ICTを活用しながら、主体的に学ぶ授業改革に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科間、他教科間で自主的に授業参観を行い、さらに授業改革に取り組んでいる。 横のつながりを意識した授業づくりをしていきたい。 ICTを活用して、学習を深める活動は徐々にできているが、自己表現の実践は不足しているため、ICTを活用しながら、考えをまとめたり、表現させたりする場をより多く設けていく。 今後もICTの「効果的な活用」の実践を増やしていく。
			② 学びのルールに基づき、「聴く」「話す」姿勢を定着させる場を設定している。	83%				94%					
			③ ICTを効果的に活用し、主体的に自己表現できる場を設定している。	77%				77%					
重点項目	働き方や業務の改善	①の割合が70% ②の割合が80%	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	61%				61%			<ul style="list-style-type: none"> 隙間時間を有効に活用したり、早めに取り組むことを意識したりしている。 すべきことの優先順位をつけ、無駄な時間がないようにしている。 テスト前4日が部停止になったおかげで以前より時間が生まれている。 見通しを持ち、業務を時間内に消化できていないことが多く、時間外勤務の削減の意識をもつことができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 計画的に物事を進められるよう意識するとともに、軽重、優先順位をつけ、行う必要がある。周囲を見て、自分ができることを積極的にいき、皆で時間外勤務の削減につなげる。 部活動の地域移行、職員全員が早く帰ろうという共通意識、長く働くことが仕事を頑張っているに代わる工夫が必要である。出勤時に退校時間の目安をあらかじめ設定し、その日のスケジュールを明確にするなど、業務の消化スケジュールを立て、計画的に進めていく。 	
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	83%				88%					

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)				数値・アンケート結果 (%)				達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			※差	数値・アンケート結果 (%)			※差		
				教員	児童生徒	保護者		教員	児童生徒	保護者			
小松市共通重点項目	学校研究	①②の教員の割合が前期80%、後期90%	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	94%				100%			<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の生徒を見取ることで新たな発見があった。 単元見直し学習、スキルタイム等の学校研究の取組が定着している。 単元見直し学習は、単元の始めに生徒に目指すゴールの姿を提示することができるため、効果的であった。 単元見直し学習の内容を楽しみを見いだしたり、次の単元に向けての取り組み方を考えたりするなど、生徒の意欲的な様子がうかがえた。 ふり返りシートや授業の工夫を実践して取り組んでいる。 全体共有ができています。 授業規律は1学期に比べ、保っている。落ち着いた授業に臨める生徒が増えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ふり返りシートに書く内容の論点がずれている。ただの感想シートになってしまうように、ふり返りシートの視点を明確にする。また、教師側も書き添えの活動で終わらせることなく、丁寧なチェックが必要である。 スキルタイムの内容によっては、間違えた問いに対する見直しが必要になってしまう生徒も見られたので、教師が個に応じて丁寧に対応していく。 	
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	94%				100%					
	指導力の向上	「主体的・対話的・授で深い学び」の視点からの	①②④の生徒の割合が前期80%、後期90%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	88%	90%		0.02	94%	87%	-0.07	<ul style="list-style-type: none"> 振り返る活動を通して、本時の学びを確認している様子が見られた。 自分でしっかり考えている様子が見られた。 課題に対して、周りの生徒と関わり合いながら取り組むことができている。 各教科の授業だけでなく、総合的な学習や学芸等で学習用端末を使用していることで、使いこなせている。 PDCAサイクルを考えながら「昨年度よりも少し良いものを」と考えながら生徒主体の学びになるように心がけている。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を通して出た意見を教員側がより広げられたり良くなることを考えている。 学年、学級による実態の差は見られる。特定の生徒とは交流できてもグループワークとして機能していない様子も見られる。親和的な学級づくりが必要である。 これまでの学校研究で大切にしていた「聴く」という点については定着してきているが、主体的に考えて表現する点については未だ課題も見られる。ペア学習やグループ学習を行う際に、意図のないペアやグループ形態により、学びが深まらないような活動になってしまわないように、教師側は生徒が積極的に協働できるようなしなかけをしていく必要がある。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。	94%	92%		-0.02	100%	92%	-0.08		
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	77%	84%		0.07	88%	82%	-0.06		
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	83%	87%		0.04	100%	88%	-0.12		
				⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	88%	92%		0.04	88%	80%	-0.08		
⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。				94%	98%		0.04	88%	96%	0.08			
学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③④の平均が中間...65%以上 年度末...70%以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	88%				72%			<ul style="list-style-type: none"> 学力向上に向けた定期テストの分析については、来年度以降も充実を図る。なお、分析結果の共有や課題解決に向けて、校内研修会や教科部会等のさらなる充実を図る必要がある。 カリキュラム・マップを見直す場面で定期的な設ける。その際、教科横断的な視点を踏まえ、総合的な学習の時間を核に据え、各教科における資質・能力などを確認する場を意図的に設ける工夫を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上ロードマップやカリキュラム・マップをもとにPDCAサイクルを確立するよう努めてきた。学力向上ロードマップについては、学期ごとに担当者を中心に検証を行うことができたが、カリキュラム・マップについてはもう少し活用を図る必要があった。 学力向上の取組については、昨年度と同じく4月当初に目的や意義を確認した。定期的に教科部会を設け、定期テストの間分析を行う場面を設けた。分析結果については、学期ごとに教務部で集約し、全教職員で成果と課題の共有化を行った。先生方の協力で有意義な取り組みとなっている。 近隣等との小中連携については、1学期については、旧6年担任と1年学担で学力についての課題を共有した。2学期以降、教務部で小中連携担当者会を3回開催した。学力調査の結果をもとに、学力向上の取り組みやGIGA活用については話し合いを行った。話し合った内容については、適宜、職員会議等で報告を行うことで、小中学校での学力についての課題共有を行った。 	
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	88%				88%					
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	94%				88%					
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	61%				66%					
家庭学習	①「家で計画を立てて勉強している」②「家庭学習で学習用端末を活用する」70%以上にする。	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	88%	72%	72%	-0.16	94%	71%	59%	-0.23	<ul style="list-style-type: none"> 学年ごとや生徒会などが中心となって、家庭学習の意欲を高める取組を行うことができた。 2学期期末テスト後に家庭学習強化週間を設けた。来年度以降についても、さらに学校全体・家庭との協力をしていく必要がある。 学習用端末の持ち帰りについては、2学期以降、計画的に持ち帰り学習を進めることができた。一方で、取り組み状況の確認については、各担当に任せきりになっており、生徒が実際に家庭学習として効果的に活用していたか、検証することができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習強化週間については、生徒にとって学びが実感できるよう、実施時期も踏まえ、さらに検討していく必要がある。 Qubenaについては担当者任せきりになっており、生徒の取組状況についてはすべてを把握できていないので、来年度以降はしっかりと担当者が生徒の取組状況を確認していく場面が必要である。 生徒が家庭学習に対し、達成感や実感を感じることができるよう、生徒の実態に合わせた課題量を学年で検討していく必要がある。 家庭学習に意欲的に取り組めていない生徒に対し、学年として保護者との連携を密にしていける必要がある。 	
		② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	61%	34%	58%	-0.27	88%	69%	45%	-0.19			